

寛容と忍耐の人

島 桂 次

昭和二〇年代も終わり頃、吉田内閣時代、たまたま私は池田勇人さんの担当記者となった。

池田さんのジャーナリスト嫌いは吉田茂さんゆずりで、記者に対しても好き嫌いが激しく、昔から知り合いの記者は茶の間に入れて酒を飲ませたりしたが、それ以外の記者はいつも門前払い、剣もほろろといった具合だった。

当時、私は駆けだし記者で、池田さんにじっくり話を聞こうと何度も粘るのだが、さして会うような機会はなかなかもらえなかった。そんなある時、池田さんは私に「俺の子分に大平正芳という政治家がいる。おまえのような駆けだし記者は、俺のところにくる前に、まず彼のところに行つて話を聞いてこい」と言う。

そこで私は、本郷にあった大平邸を訪ねていった。当時、代議士になつたばかりの彼を訪ねる記者など、ほとんどいなかったのだろう。私が訪ねていった時も、「お前さん、場所を間違えたんじゃないか。俺のところにくても、しようがないじゃないか」と言いながら、にやにや笑っていたのを憶えている。この時が大平さんと私の最初の出会いだった。

それから私は大平邸に頻繁に通うようになる。当時、私はボトル一本ぐらいの酒を平気で毎日飲んでいますが、大平さんは一滴も酒を飲まない人だった。私は志げ子夫人に「ウイスキーを出せ」と、あつかまし

くも無理を言い、ひとり、酒をがぶ飲みしていたものだ。一方的に酔っ払ってわあわあしゃべる私に、大平さんは嫌な顔ひとつせずに、自分は水を飲みながら、何時間でも私が帰るまで応対してくれていた。そんな私に業を煮やしたのは、むしろ志げ子夫人だったと思う。私が玄關に入るやいなや、ほうきのあるだけ廊下に並べかけ、手拭いをかけて回るのに忙しかった、と後に本人から聞いた。

昭和三五（一九六〇）年、日米安保条約改定をめぐる大騒動の中で岸内閣が倒れた。池田さんと石井光次郎さん、藤山愛一郎さんの三人が立候補して、総裁選挙が行なわれた。決選投票で池田さんが当選し、新内閣を組閣することとなった。

この頃、事実上、内閣官房長官に内定していた大平さんは、箱根の仙石原で静養中の池田さんを訪ね、新内閣はまず何をすべきか、それをなすためにどのような組閣をすべきなのか、という話し合いをしていた。その時、私も仙石原に同行し、帰りは大平さんの車に同乗していた。

当時、箱根、東京間はいまとは違い道路が悪く、四、五時間以上はかかっただろうが、車の中で大平さんは、念願の池田内閣誕生という喜びで、珍しく鼻唄まじりに『北帰行』や『夜霧の第二国道』などを口ずさんで上機嫌だった。

ところが、途中からだんだん静かになっていき、深刻な面持ちを深めていった。長い間、目を閉じ、沈黙を続けた後、私に静かにつぶやいた。

「島くん、池田さんは国論を二分する安保騒動という大変な事態を收拾して、これから日本の政治を軌道に乗せることが本当にできるだろうか？ 池田さんの暴言癖は、『貧乏人は麦を食え』だけではない。いつも言いたいことを言い、その度に大臣の席を棒に振ったことが何度もある人だ。池田さんを助けてこの難局を本当に切り抜けることが、この俺にできるだろうか？」

彼は、さらにこう続けた。

「島くん、いろいろ考えてみると、池田さんを補佐するために俺はどいう役割を果たしたらいいんだろう？ 考えてみれば、池田さんにはあつて俺にはないものはいくらでもある。だが、池田さんには足らず俺にはあるのはなんだろう。……少なくとも俺には、相手の立場になつてできるだけ考える寛容さと忍耐さだけは自信がある。それが、これからの池田さんには必要なことではないか」

その直後、池田内閣のキャッチフレーズが発表された時、私は「大平さんもなかなかやるな」と実感した。

「寛容と忍耐」……これはまさに人間・大平正芳を象徴する言葉である。安保騒動冷めやらぬ中、池田内閣が順調にスタートできたのも、ともすれば暴走しがちな池田さんに対して、大平さんが文字通り「寛容と忍耐」をもつて池田さんを補佐したからこそと思つのである。

寛容と忍耐強さを示すエピソード

彼持ち前の寛容さと忍耐強さは生来の資質はもちろんだが、若き日の苦勞によるところも多い。

彼は四国・香川の百姓のせがれに生まれ、さほど裕福ではない家庭に育つた。高松高等商業学校、東京商科大学（現在の一橋大学）に、地元の有力者の援助で進学させてもらえたという苦勞の人である。これは、当時の政治家の多くが裕福な家庭に生まれ、旧制高等学校から大学というコースに進んだのとは、まったく対照的である。

寛容さでいえば、こんな話もあった。

四〇年前、NHKが内幸町にあつた頃、私が通つた新橋の寿司屋があつた。そこで、ふと大平さんのことが話題になつた時のことだ。

寿司屋の主人が思わぬ話を聞かせてくれた。

「私がこの店を持てたのは、実は大平さんのおかげなんです。戦前、私は大蔵省の寮でまかないをやっていました。そこで大平さんと知り合ったわけです。戦後、私がこの店を開く時、資本もなく途方に暮れていたら、大平さんが進んで援助してくださった。そのおかげで、この店を開くことができました。その後、たまに私が大平さんのお宅に伺う度に、大平さんは金銭問題にまったく触れずに『どうだ元気にやっているか』と励ましてくれるだけなんです」

大平さんは知人や親戚の借財を、人には黙って支払っていたことが何度かある。時には彼の年収以上の額を工面していたようだ。

見かねた私は「いくら親戚、知人とはいえ、そこまでしなくてもいいじゃないですか」と疑問を呈したことがある。すると彼は、穏やかな口調で「人のためにしてあげられることは最大限してあげたい。それは、政治家としてというよりは人間として必要なことだ」と言った。

言うは易し、行方は難し……多くの人には、このような真似は到底できないように思う。

忍耐強さでいえば、彼は家族に対していっぺんたりとも怒鳴ったことがないという。

事実、志げ子夫人が亡くなる前、毎日のように夫人に呼ばれて虎の門病院に通い詰めた折にも、雑談をしながら彼女からよくその話を聞いた。

「いろんなことがあつたけれど、主人に一番、感謝していることは、私たち家族にいっぺんも怒鳴ったり、怒ったりしたことがないこと。私は、それをとても感謝しているの」と言っていた。

ちなみに志げ子夫人は「台所に立ったこともなければ、御飯を炊いたことも、いっぺんもないのよ」と冗談まじりに言うくらい、恵まれた環境に育つたお嬢様気質の人だった。そんなじゃや馬で明るい彼女

が、しんみりとそういう話をしてくれたのを、昨日のように思いだす。

家族や知人に対してそうなのだから、政治生活においては、さらに忍耐強さを発揮した。

池田さんが病気で東京オリンピックを最後に引退することになった頃のことだ。次の総裁候補をめぐって佐藤栄作さん、藤山愛一郎さん、河野一郎さんなどが総裁選を争うこととなった。

大平さんは当時、池田さんの後継者には同じ吉田学校の卒業生である佐藤さんが一番適任と考えていた。ところが、前の総裁選挙で佐藤さんと池田さんが激しく争った際の怨念が池田派内にあつたのだろう。その余波を受けて、池田派の中でも前尾繁三郎さんらを中心に、この際、佐藤さんではなく藤山＝河野連合に政権を渡したほうがよいのではないか、という動きが少なからずあつた。

事実、池田さんもどちらがよいか迷った時もあったのだが、終始、佐藤さんを支持していたのが大平さんだったのである。結果的には佐藤さんが指名され総裁に就任したのだが、皮肉なことに、どこでとりちがえられたのか、佐藤さんは、池田派内の反佐藤派の中心人物が大平さんであると誤信してしまった。佐藤内閣は七年もの長期政権を続けたが、その間、大平さんは絶えず佐藤さんに冷たい扱いを受けてきた。

その時なども、私は事実を知っていただけに、「佐藤内閣を作ったのは、事実上あなたや角栄さんではないですか。それを佐藤さんに逆に受け取られたままで、あなたの気持ちは納まるのですか？」と、声を荒げて問い詰めたこともある。

すると彼は、「そんなことは、どうでもいいじゃないか。佐藤さんには佐藤さんなりの考えがあつて、そうしているのだ。時には耐え忍ぶことも政治家には必要なんだ」と、きっぱり言つたのだ。

田中さんとの深い親友関係

佐藤内閣が終わりに近づいたころ、田中角栄さん、福田赳夫さん、三木武夫さん、そして大平さんの四

人が、総裁選挙を争うことになった。この「三角大福」の戦いは、結局、大平さんの寛容さが田中勝利を導いたといえる。というのも、田中さんは佐藤派、大平さんは池田派だったが、派閥を越えて二人は深い親友関係にあったからだ。

二人は、池田さんと大平さんと同様、きわめて対照的な政治家だった。大平さんの「寛容と忍耐」に対し、田中さんは「決断と実行」で、両者は相補うような関係を持っていた。

池田内閣時代に田中さんが大蔵大臣に抜擢されたのをはじめ、田中さんを重用するよう池田さんに進言したのは、ほかならぬ大平さんだった。大平さんは、年下の田中さんを陰に陽に応援してきた。その二人が共に総裁を争うことになったのだ。

私はある日、田中さんにこんな進言をしたことがある。

「田中さん、あなたが党内最大派閥の領袖で、今度の総裁の最有力候補であることは間違いない。だが、あなたはまだまだ若い。急ぐことはない。先に大平さんに総理大臣をさせて、それを田中さんが継ぐというかたちの方がよいのではないですか」と。

だが、彼は例の調子で、

「大平くんは確かに俺より優れている面がある。だが、彼は幹事長と大蔵大臣のポストをまだ経験していない。総理の職を担うには、この二つのポストをやっておかないと、やりづらいことも多かる。だからこの際、すでに二つのポストを経験している俺が、まず総理になる。その代わり俺がやった後は、必ず大平くんに総理をしてもらう。その方が大平くんのためにもなるんだ」と言って、譲らなかつた。

結局、大平さんが田中さんの言葉を聞き入れ、田中「大平連立内閣ともいえる新内閣が誕生した。田中内閣時代、大平さんは進んで田中さんを助けて、日中国交回復交渉をはじめ外交面で活躍し、二人の共同戦線は続いていく。

その後、様々な出来事があり、三木内閣、福田内閣と続いたが、この間、終始、田中さんは大平さんの厚意に報いるべく、大平内閣の実現に積極的に協力していたことは確かである。

この二人の関係が単なる政治家同士の利害関係ではなく、深い友情に結ばれていたということは、私が二人のところに入り入りしていただだけに、よく知っている。

昭和五一（一九七六）年、三木内閣の後を受けて、福田さんと大平さんが総裁選を争うことになった。当時、私はアメリカ総局長として日本を離れていたが、風の便りで福田さんと大平さんが、総裁選を避けるために、福田総裁、大平幹事長という態勢でスタートし、二年後には必ず大平さんに総理の座を明け渡すと文書で約束した、という話を聞いた。

私はすぐさま大平さんに電話をして、「あなたは福田さんと約束したそうだが、そんなものが当てになりますか！ 岸さんと大野さんとの約束を思い出して下さい。大野さんは、岸さんに約束を反古にされたじゃないですか。総理総裁を目指すなら、いまこそ断固戦うべきです」ということを強く進言した。

それに対して大平さんは、「島くん、だまされても、それが国のためになるならいいじゃないか」と言っていて聞く耳を持たない。「あなたのそこがだめなんです」と私は執拗に食い下がったのだが、大平さんの決意は変わらなかった。

結局、私の予想通り約束は忘れ去られ、昭和五三（一九七八）年十一月、福田さんは自民党史上初の党員・党友全員参加による総裁公選を行った。福田さん自ら優位と踏んでの行為だったが、幸か不幸か大平さんが大差で勝利し、大平政権が誕生した。この時、田中さんは大平さんのために力を尽くし、約束を果たしたのである。

「総理総裁は戦ってとるものです」という私の進言が、いかに大平さんにとって苛酷だったことが、その後の一般消費税をめぐる攻防に、それが現われていく。

一般消費税をめぐる攻防のエピソード

夜十一時頃、私が大平さんの家に電話すると、志げ子夫人が小声で言った。「主人、もうずいぶん長い間、応接間で頭をかかえこんだまま、うずくまっているの。島さん、ちよっと寄って話してみてよ」と言う。早速、私が訪ねてみると、大平さんは相変わらず同じ格好のままである。声をかけると、彼はようやく頭をあげて、「一般消費税をやるか否かで、まだふんぎりがつかず悩んでいる」と言葉少なにつぶやいた。いま思えばずいぶん無責任だったが、私はつい大声で、「なんですか！ 政治家がその政策を必要だと思つたら、内閣を投げ出しても自分の命を捨てても、信念にしたがつてやるべきじゃないですか！」と怒鳴ってしまった。

ところが彼はそれに何も答えずに、また下を向いたまま目を閉じて黙ってしまった。いま思えば、その姿こそ、彼の最大限の葛藤の表現だったのだろう。後で夫人に聞いたところによれば、毎晩のように、大平さんは布団に入ってから、何度も寝返りをつつては思い悩んでいたという。

彼にしてみれば、一般消費税を導入し税制改革を断行しなければ、もはや日本の財政は破綻するしかないと確信していたのだろう。だが、他方で導入を訴えれば選挙で負けることもわかりきっているだけに、その葛藤に悩んでいたのである。

結局、彼はたとえ自民党が選挙で負けても、この際、一般消費税を導入すべきだという決意を固め、選挙に臨むことになるのだが、この頃の大平さんは、すでに心身ともに消耗し尽くしていたのだろう。

その上に、いわゆる「四十日抗争」が始まり、彼をめぐる状況は苛酷を極めることとなる。

大平さんが総裁であるにもかかわらず、非主流派は福田さんを擁立。国会の首班指名に、自民党内から二人の候補が立つという異常事態が起こったのだ。

これに対し、私はジャーナリストとして大平さんに進言した。

「大平さん、党内の総裁選挙ならいざ知らず、国会の首班指名に同じ党から二人の候補が出るなど前代未聞、そんな勝手な党員は即刻除名すべきです。そもそも保守合同時代が長過ぎたのです。これを機にあなたが決断して、本格的な二大政党制に向けて日本の政治を変えていくべきではないですか」と。

大平さんは、目を閉じたまま、

「一面では確かにキミの言う通りだ。しかし、野党に政権担当能力のない現実の中では、何よりも政局の安定が不可欠だ。雨降って地固まるだよ、島くん。いまは地面を割るべき時ではない」と言った。

こうして決選投票で大平さんが首班に指名され、第二次大平内閣が成立した。ところが、昭和五五（一九八〇）年五月、野党から提出された内閣不信任案に、自民党非主流派議員が便乗して欠席し、不信任案が成立してしまう。大平さんは即時、内閣解散を行い、憲政史上初の衆参同日選挙が行なわれることとなったのである。

そんな度重なる苦難の中で、彼は横浜での選挙演説の途中で倒れて入院、再び虎の門病院を退院することもなく帰らぬ人となる。

前の日まで私は、大平さんがあんなに簡単に死んでしまうとは思っていなかった。あの日、夜十二時頃だったか、志げ子夫人から「お父さんの心臓がおかしくなっている。いま人工呼吸をやっているけど死んでしまうかもしれない」と、悲痛な声で電話がかかってきた。それからおよそ一時間後、私は彼の臨終の知らせを受けた。

三〇年近くにおよぶ大平さんとの付き合いを振り返って思うのは、政治家・大平正芳が、いかに「寛容と忍耐」の人だったかということに尽きる。しかし、必要な時には一般消費税導入の時に見られたような、政治への断固たる決断も持っていたのである。

（前日本放送協会会長）